

まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (15)

## 息栖神社と神栖地方に行く



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って  
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (15)  
息栖神社と神栖地方に行く

木村 進

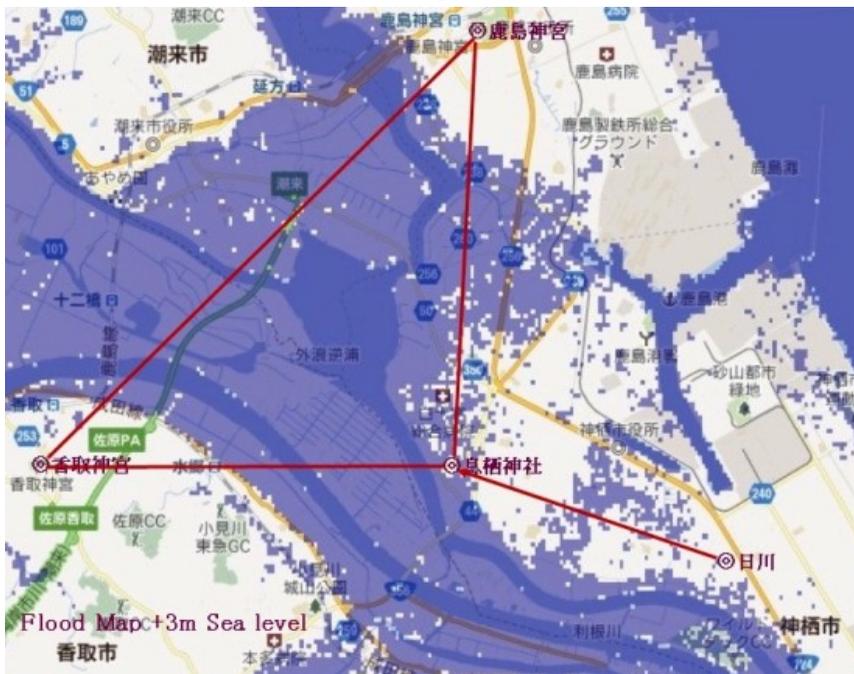
ふるさと“風”の会

## (1) 息栖神社-東国三社

息栖神社は鉄道の駅からは離れてしまいましたので、今では鹿島・香取の両神宮に比べれば訪れる人もまばらです。江戸時代にはかなりにぎわいを見せていたようですので一度訪れたいと思っていました。

仕事の関係で銚子の方に時々出かけていますが、この息栖神社の近くも通ります。そこで連休前の4月末に神社に立寄って見ました。

鹿島神宮・香取神宮といういわば別格の神社があるわけですが、これにこの息栖神社を加えて東国三社と呼ばれています。3つの神社を結ぶと直角三角形となるために、レイラインの心霊スポットとしても注目されている場所なのですが、これも息栖神社の位置は途中で直角三角形になる位置に移動していますので故意に作られたものと考えられます。



Flood Map によって Google 地図に今より水位が 3 m 高いとして昔を想像した地図にこの東国三社の位置関係を載せてみました。

地図に日川を載せているのは、この息栖神社が大同 2 年（806）にこの日川地区よりこの現在の地に移されたとされているからです。

三代実録などの古書で「於岐部説神社」が書かれていますが、これは今の息栖神社の事だと考えられています。

於岐部説＝おきつせ＝沖洲となりますので、この利根川入口の沖洲にある神社という意味合いもあると思われます。

利根川と常陸川が合流する少し手前の水門の少し上流に常陸川に架かる橋を息栖大橋といいます。

この橋を（千葉県側から）渡って次の信号を左（西）に曲がって少しいったところに息栖神社の森があります。



通りから少し入ったところに入口鳥居があります。

この神社はとても静寂な空気が漂っています。身が引き締まるようです。

この神社の場所は、今では行くのが不便なため訪れる人も少ないようですが、霞ヶ浦水運が発達していた江戸時代には、霞ヶ浦から利根川に物資を運ぶ要のような位置にあり、信仰もかなりありました。



神社の境内も綺麗に掃き清められており、ひっそりとした雰囲気はさすがに東国三社の一つです。

歴史的には何度か建て直されているので建物としてはそれ程古いとは思われません。

4月末ですのでボタン桜と赤い神社の拝殿や鳥居が緑の中で美しさを引き立ててくれます。

昭和35年の火事で社殿を新築したことが記されています。

# 息 栖 神 社

息栖神社は、古くは日川に鎮座していた祠を、大同二年、右大臣藤原内麿の命に依り現在地の息栖に遷座したと伝承されている。

史書「三代実録」にある「仁和元年三月十日乙丑條、授常陸国正六位上 於岐都説神從五位下」の於岐都説神とは息栖神社の事とされている。(古今類聚常陸国誌・新編常陸国誌)

古来より鹿島・香取との関係は深く、鎌倉時代の鹿島神宮の社僧の記した「鹿島宮社例伝記」、室町時代の「鹿島宮年中行事」には祭例等で鹿島神宮と密接な関係にあった事が記されている。

祭神は、現在岐神・天鳥船神・住吉三神(上筒男神・中筒男神・底筒男神)とされ、海上守護・交通守護の守り神と奉られている。

江戸時代には主神を気吹戸主神と記しているものもあり(木曾名所図会、新編常陸国誌)、さらには現在境内にある芭蕉の句碑「此里は気吹戸主の風寒し」は、その関連を物語っていると思われる。

社殿は享保八年に建替えられたが、それが昭和三十五年十月焼失し、昭和三十八年五月に新たに完成した。末社、高房神社・伊邪那岐神社・鹿島神社・香取神社・奥宮・江神社・手子后神社・八龍神社・稲荷社・若宮。

## ※ 祭 日 ※

|         |     |          |     |
|---------|-----|----------|-----|
| 一月 一日   | 元旦祭 | 六月 三十日   | 大 祓 |
| 一月 七日   | 白馬祭 | 八月 二十七日  | 風 祭 |
| 二月 (立春) | 節分祭 | 十一月 十三日  | 秋 祭 |
| 三月 六日   | 祈念祭 | 十二月 三日   | 献穀祭 |
| 四月 十三日  | 例 祭 | 十二月 三十一日 | 大 祓 |

上の説明看板は神栖町教育委員会が門の入口に掲げたものです。日川から移されたことが書かれています。

「息栖神社は、古くは日川に鎮座していた祠を、大同二年、右大臣藤原内麿の命により現在地の息栖に遷座したと伝承されている。

史書「三代実録」にある「仁和元年三月十日乙丑條、授常陸国正六位上 於岐都説神從五位下」の於岐都説神とは息栖神社の事とされている。(古今類聚常陸国誌・新編常陸国誌)

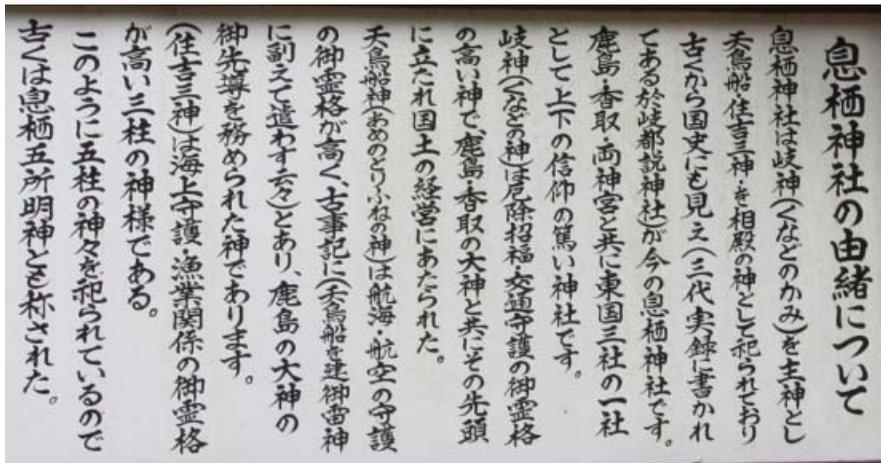
古来より鹿島・香取との関係は深く、鎌倉時代の鹿島神宮の社僧の記した「鹿島宮社例伝記」、室町時代の「鹿島宮年中行事」には祭例等で鹿島神宮と密接な関係にあった事が記されている。

祭神は、現在岐神・天鳥船神・住吉三神(上筒男神・中筒男神・底筒男

神)とされ、海上守護・交通守護の守り神と奉られている。

江戸時代には主神を気吹戸主神と記しているものもあり(木曾名所図会、新編常陸国誌)、さらには現在境内にある芭蕉の句碑「此里は気吹戸主の風寒し」は、その関連を物語っていると思われる。

社殿は享保八年に建替えられたが、それが昭和三十五年十月焼失し、昭和三十八年五月に新たに完成した。末社、高房神社・伊邪那岐神社・鹿島神社・香取神社・奥宮・江神社・手子后神社・八龍神社・稻荷神社・若宮。」



こちらは神社側が拝殿近くに掲げた説明看板です。少し教育委員会のものとはニュアンスが違います。

「息栖神社は岐神(くなどのかみ)を主神とし、天鳥船・住吉三神を相殿の神として祭られており、古くから国史にも見え(三代実録に書かれてある於岐都説神社)が今の息栖神社です。鹿島・香取・両神宮と共に東国三社の一社として上下の信仰の篤い神社です。

岐神(くなどの神)は除厄招福・交通守護の御霊格の高い神で、鹿島・香取の大神と共にその先頭に立たれ国土の経営にあたられた。天鳥船神(あめのとりふねの神)は航海・航空の守護の御霊格が高く、古事記に(天鳥船を建御雷神に副えて遣わす云々)とあり、鹿島の大神の御先導を務め

られた神であります。(住吉三神)は海上守護・漁業関係の御霊格が高い三柱の神様である。このように五柱の神々が祀られているので古くは息栖五所明神とも称された。」

守護の神としての御神徳が顕著で神前に祈念する者にその限りない御恩頼を垂れさせられ御守護下さるものである。

社前の水中(川岸)に日本三霊水の一の忍潮井がある。俗に女瓶男瓶と云って、水中(川岸)の鳥居の中(一の鳥居の両側)にあつて、この瓶から清水の湧き出でるが男瓶は銚子の形で、女瓶は土器に似て、一説には神代のものと云うが、常に水底に沈んで居り、晴天水澄む日でなければ見えない  
それぞれじっくり読むととても面白そうですので、そのまま写真で掲載しました。

境内に置かれていた昔の「礎石」がありました。

一緒に書かれていた説明文を載せておきます。

「息栖神社の御本殿は平城天皇の御代(大同二年四月十三日)806、奈良時代に此の地に遷宮されました。以来、貞観八年一月(876)、宝永三年(1704)、享保八年(1723)、弘化四年(1848)と、数回に及ぶ立替えがありました。此の五個の石はそのいずれの時に礎石として使用されて以来、昭和35年迄その務めを果たしました。」